
お人形アソビ

山田ぽぽろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お人形アソビ

【Nコード】

N5044L

【作者名】

山田ぼぼろ

【あらすじ】

科学者とその作品。

作品はただ、彼を見つめている。その命令をきくために。

變じている。

「わたしを殺して、楽しかった？」

「ああ、とても」

「ならいいわ」

わたしの人形はそう呟いて、そのまま活動を停止した。最近流行の、一山幾ら、という安物ではないから、そう簡単に壊れるはずはない。どうやら、バッテリーが切れたようだ。充電したのが一週間前だったので、無理も無い結果だ。

わたしは背中コンセントに、充電用のプラグを差し込む。びくん、と跳ねる細く白い四肢は、まるで人間のようだ。発注したタイプが、極力人間に似せたヒューマンタイプなのだから、当たり前の話だが。

電流が流れる瞬間の痙攣だけで、人形はそれ以降身動きもせずそこにいる。バッテリーが切れると同時に電源も落ちているようだ。びくりとも動かないその人形の肌に、うっすらとナイフで切れ目を入れる。ぷつぷつと紅い液体が溢れ出てきた。ただのオイルだが、その粘性と色は、まるで本物のそれのようで、自分がそうやるうとした意思の元であったのにも関わらず、酷く気持ちが悪い。

裂かれた痛みを感じる様子は、人形には無い。それはそうだ。人間ではないから。

先ほどわたしが力いっぱい占めた首には、あざも残らない。人形

だから。

わたしは別に殺人が趣味なわけではない。苦しむ顔が見たいから、などと唾棄すべき異常な思考もない。ただ、あんまりこの人形が人間の間ようだから、怖くなったのだ。

ジュン

充電が完了しました、と人形の口が動いた。それは、記録されたプログラム。自分の意思ではない。だって、人形なのだから。

先ほど動いた唇は、例えばキスをしても気持ちよいと感じるくらいの弾力に計算されている。

柔らかな肌も、つややかな黒髪も。全て、性的な意味で満足させるように、それこそ様々な欲求に耐えられるように、全て造られた。

わたしの愚かな我侷を全て受け止め、呑み込む器は、目を閉じて

起動されるときを、静かに待っている。

放っておきたい。放したくない。目を開けたせたい。目を開けないで欲しい。

わたしは、その体を抱きしめた。柔らかかった。けれど、固かった。どこか拒否されたようで、とても悲しい。拒否されても、わたしは彼女が好きだった。だって、そうだろう。ずっと一緒にいたのに。なのに裏切るなんて、考えもしなかったのだ。だって、あんなに愛し合っていたのに。愛し合って、想い合っていたのに。

信じられなかったんだ。だってそうだろう、なあ、答えるよ。どうして答えないんだ。

わたしは、柔らかかなその頬に触れる。彼女の頬の弾力によく似ていた。彼女はもうこんなに柔らかくない。彼女に似せたロボットは、わたしに目覚めさせられる時を待っている。

今から思えば、わたしは幼い頃よりロボットを特別な意味で見
いたと思う。性的な対象にも、好意の対象にも、何か機械的なもの
が存在していた。そんなときに出会った彼女は、わたしにとって最
高の女性だった。ロボットに対する造詣も深く、わたしとの話も合
う。天が使わした、と非科学的なことを本気で考えていた。

けれど、あの日、いつもの研究室で見た彼女は、わたしの金庫か
らデータを盗んでいる最中だった。問い詰めた彼女は、言った。

『あなたは結局ロボットしか愛せない異常者なんだわっ！』

何でそんなことを言うんだ。わたしは、本当に愛していたのに。

まるで、ロボットみたいな君を、本気で愛していたのに。

わたしは、ロボットに向かって微笑む。彼女によく似せて造った人形は、その長い睫毛を伏せてわたしが起動するときを待っている。ああ、そこに居たのか。

わたしは、笑う。泣きながら、けれど笑う。一体どこで間違ってしまったのだろう。ただ、わたしは彼女を愛していた。紛れも無く愛していた。そのどこが、ああ、どこが。

わたしは、部屋の隅に転がる彼女を見つめる。腐敗が進んだ体は、もう崩れてしまった。ところどころに見える骨が、妙に白くて、彼女の肌の白さを思い出させた。ああ、ごめんね。ごめんね、愛してるよ。

わたしは、彼女を起動させる。起動ボタンは、首筋だ。かすかに感じる突起に、力を入れる。こうしていると、まるで口付けを強請っているかのような。ああ、本当はずっとこうしたかった。

彼女を、愛して、愛して、愛していた。それは、本当だったのだ。神に、誓ってもよい。主よ、わたしは彼女を愛している。

ゆっくりと開かれる瞼。その瞳孔にわたしを見つめる。ああ、幸

せだ。とても。

「マスター、ご命令を」

「わたしを、殺してくれ」

すぐ、側に行くよ。

お人形アソビは孤独なもの。

あつたかくなんてなれないの。

だって、生まれるものはなにもないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5044/>

お人形アソビ

2010年10月28日06時47分発行